

満州国興安北省三河地方の満蒙開拓団

愛知大学 森 久男

はじめに

満州国時代、日本から北満各地に送り込まれた満蒙開拓団は中国人農民から既耕地を収奪する形で入植をすすめた。しかし、清末以来、東部内蒙古（興安省）では、蒙古族の放牧地・農地が漢族農民によって占拠された結果、蒙漢両民族間には土地所有権をめぐる鋭い民族対立が存在しており、同地域に入植した満蒙開拓団は二重の土地収奪という複雑な民族関係を生み出した。当時、興安省の日系官吏は、蒙古族牧畜民・農民の土地を保護するため、漢族農民の蒙地への入植を制限する一方、国策に従って日本の満蒙開拓団の入植に便宜をはからざるをえないという矛盾した立場に置かれていた。

本稿の課題は、興安省の満蒙開拓団、とくに興安北省オルコナ左翼旗三河地方に入植した満蒙開拓団に焦点を合わせて、日本の満蒙開拓政策の特質を解明することにある。興安北省の鉄道線（ハルピン・満州里間）以北百数十キロにある三河地方は白系ロシア人が居住する農業・牧畜業地帯で、興安省の中でも特殊な位置を占めている。したがって、本稿の叙述にあたって、興安省と満州国他地域との比較をおこなうとともに、興安省における興安北省の特殊性にも留意しながら考察をすすめる。

一 興安省に入植した満蒙開拓団

1. 興安省の農業・土地問題

清末期の蒙地開放に伴う漢族農民の入植につれて、東部内蒙古の各盟旗で蒙古族は放牧地を奪われていった。従来、遊牧生活を送っていた蒙古族には土地所有の観念はなく、漢族農民の入植に対して、一部の遊牧民は北方へ逃避していったが、盟旗の移動制限により、周囲を農地で取り囲まれた一部の遊牧民は、みずから農民となって狭い土地での生活維持をはかるほかなかった。しかし、辛亥革命以降、漢族による大規模な土地収奪がおこなわれたので、蒙漢両民族間の民族矛盾は激化した。

1931年9月、満州事変が勃発し、翌年3月に満州国が成立した。1932年6月、満州国政府は地方行政制度を整備するにあたって、土地所有の観念をもたない蒙古の遊牧民居住地域の特殊性に鑑み、東部内蒙古・ホロンバイルの蒙古族が比較的多く居住する地域に特別自治区域として興安省を設け、北分省・東分省・南分省に区分した（1933年5月、西分省成立）。1934年12月、興安省の各分省は独立した省に昇格し、興安北省・興安東省・興安南省・興安西省ができた⁽¹⁾。1943年10月、興安総省が設置され、興安北省以外の三省は興東・興中・興南・興西地区に区分された。

満州国政府は蒙古族の放牧地・農地を漢族農民による入植から保護するため、1932年11月に

「興安各省各旗旗地保全に関する件」を發布し、非開放蒙地の私放を禁止した。東部内蒙古の各盟旗は開放蒙地で蒙租を徴収する権利を有していたが、1938年9月に興安省外開放蒙地地理権奉上げがおこなわれ、吉林省を中心とする開放蒙地の蒙租権を整理し、地租を県政府の土地税に一本化した。1939年8月、錦熱蒙地地理権奉上げがおこなわれ、錦州・熱河にある私放地の蒙租権が整理され、各盟旗の蒙租徴収権は消滅して、土地所有権者の権利が明確になった⁽²⁾。1942年8月、興安局は「蒙地管理要綱」を関係省長に令達し、興安四省の蒙地に関する基本的指針を示した⁽³⁾。

満蒙開拓団という言葉に耳にすると、あたかも荒地を開墾するかのとき語感を有するが、実際には、満州拓殖公社を通じて漢族農民の既耕地・家屋を低価格で買収し、開拓団に与えるものであった。開拓団員は一戸あたり約20haの農地を入手したが、一部の水田経営を除けば、中国北方畑作農法に習熟していなかったため、中国人農民を雇って耕作させるか、あるいは彼らに土地の多くを貸し付けて地主化するほかなかった。

興安四省各旗では蒙古人旗長が任命されたが、旗公署の日系参事官が行政上の実権を掌握した。日系参事官の中には「蒙古最良」が多く、満蒙開拓団の入植には反対の空気が強かったが、満蒙開拓の国策を押し止めることはできず、1940年頃からしだいに開拓団の入植者数が増大していった。北満各地では、漢族農民の土地を開拓団が占拠したが、興安南省・東省では、漢族農民が蒙古族から合法・非合法の手段で占拠した土地を、さらに開拓団が占拠するという重層的な土地収奪構造が形成された。

興安北省は広大な地域であるが、鉄道線以南は乾燥して農業生産に適さない放牧地である。鉄道以北の三河地方には農業に適した未開墾地

が広がり、小麦・大麦・燕麦・ソバ等が栽培可能であるが、寒冷な気候のため、北満各地の伝統的作物である高粱・大豆・粟・トウモロコシ等が作付けできず、漢族農民はほとんど入植しなかった。鉄道以北でも家畜が放牧されたが、三河地方は興安嶺の森林地帯を控えていたので、草原に住む蒙古人はあまり同地に近づかず、少数の狩猟民族が居住するほか、白系ロシア人が特色ある有畜農業を営んでいた。

2. 興安各省の満蒙開拓団

興安四省の中で、ソ連との国境地帯から離れている興安西省には満蒙開拓団は入植していない。付表は「興安省における満蒙開拓団の入植者数（1938～1942年）」である。

終戦時の興安省における満蒙開拓団数は47（興安北省4、興安南省11、興安東省32）で、その種類別内訳は、一般開拓団31、義勇隊開拓団10、義勇隊訓練所3、報国農場2、開拓実験農場1である。このほか、興安東省扎蘭屯には開拓女塾が置かれている。

終戦時における満州国の満蒙開拓団の在籍者総数は27万名（応召者4万7000名）、興安省の在籍者数は1万721名（応召者1659名）で、後者は前者の3・9%（3・5%）を占めている。その地域別内訳をみれば、興安北省498名（280名）、興安南省3579名（527名）、興安東省6644名（852名）である⁽⁴⁾。

興安北省のホロンバイル草原では蒙古族が遊牧生活を送っていたが、鉄道以北の三河地方では大興安嶺の広大な森林地帯に五百名余のツングース系狩猟民族が居住するほか、ロシア革命後に白系ロシア人がアルグン河を越えて同地方に流入し、数千名の農民が有畜農業を営んでいた。興安北省の開拓団数は4（東オルコナ旗2、ソロン旗2）と少ないが、広大なホロンバイル草原と大興安嶺山麓の三河地方の自然条件を背

付表 興安省における満蒙開拓団の入植者数（1938～1942年）

	興安北省	興安南省	興安東省	興安三省	満州国
1938年	77	107		184	3,584
1939年	106	115		221	49,946
1940年	112	174	986	1,272	113,936
1941年	104	190	3,076	3,370	123,606
1942年	590	1,071	4,551	6,212	164,327

出典：満州国通信社編『満州開拓年鑑』昭和15-19年版

景として、特色ある開拓団が入植している。

東オルコナ旗では、1936年3月に「三河共同農村開拓組合」が入植し、ハイラル北方の三河地方で岡部勇雄等の鏡泊学園卒業生数名が、白系ロシア人の農法・生活習慣を模倣しながら、牧畜を主体とした有畜機械農法を導入した。1940年4月、三河共同農村の隣接地に興安義勇隊訓練所の先遣隊が、11月に本隊の近内中隊が到着し、白系ロシア人部落で実習しながら農業技術の習得に努めた。1942年10月、興安訓練所は興安義勇隊開拓団に移行した⁽⁶⁾。

ソロン旗では、1937年4月に鏡泊学園の関係者とハイラル駐屯笠井部隊の除隊兵が「呼倫貝爾開拓組合」を編成して、牙克石東方の免渡河に入植し、牧畜を主体として関東軍に乗用馬を供給した⁽⁸⁾。「義勇軍が大興安嶺を越すのが内原訓練所長加藤完治氏の理想」であり、満鉄経営の烏奴耳義勇隊訓練所が竣工して、1940年4月に兵藤中隊の先遣隊が、7月に本隊が入所した⁽⁷⁾。のち、同訓練所の義勇隊員は興安東省ブトハ旗に移動し、1942年10月に成吉思汗義勇隊開拓団に移行した⁽⁸⁾。1940年7月、牙克石義勇隊訓練所に柴垣中隊が入所し、1942年10月に同訓練所は牙克石義勇隊開拓団に移行した⁽⁹⁾。

興安南省は純遊牧地帯と農耕地帯の境界線に立地し、草原と農地が混在している。コルチン

右翼前旗・中旗・後旗、ジャライト旗では、帰流河と洮児河の水利によって早くから開放蒙地が形成され、コルチン左翼前旗・中旗・後旗、通遼県、開魯県等では、広大な開放蒙地が広がっていた。興安南省（興中地区・興南地区）の開拓団は11あり、一般開拓団3、義勇隊開拓団5、義勇隊訓練所3が置かれた。興中地区はノモンハンの戦場に近く、対ソ開戦の際にはソ連軍機械化部隊がアルシャン方面から興安街・白城子一帯へ殺到することが予想されたが、同地区に駐屯する部隊は五叉溝の関東軍第七師団のみであった。すなわち、「義勇隊は当時関東軍の予備軍的存在」⁽¹⁰⁾であり、西部国境地帯の国防的重要性から、義勇隊開拓団・訓練所が重点的に配置された。

興安東省の面積は広大であるが、人口はきわめて希薄で、ダホール人・ソロン人・オロチョン人等が原始的な狩猟・放牧生活を営み、一部は農業にも従事していた。山岳地帯・遊牧地帯を除いて、興安東省には広大な未開墾地が残されており、既耕地は可耕地面積の約3％にすぎなかった⁽¹¹⁾。従来、興安東省は満蒙開拓団の入植に消極的であったが、1940年から6000戸の蒙古族を入植させる六カ年計画を推進するとともに、1941年・1942年に1万1000戸の日本人・朝鮮人を入植させる第一期入植計画を立案した

(12)。

興安四省の中で興安東省の開拓団は団数・入植者数ともにもっとも多く、その特徴は満州国内他地域の開拓団と大差ない。興安東省の開拓団は32（ブトハ旗22、阿榮旗9、モリタワ旗1）で、一般開拓団26、義勇隊開拓団3、報国農場2、開拓実験農場1が置かれた。

興安南省の「興安東京開拓団」「仁義仏立開拓団」等は、満州拓殖が強制買収した既耕地に入植したので、周辺の漢族農民との関係が険悪であった。また、興安東省は人口密度が希薄であるとはいえ、鉄道沿線には漢族農民がすでにかなり定住しており、日本の満蒙開拓団は条件のよい既耕地に集中的に入植したので、漢族農民の恨みを買った。他方、興安北省は漢族の北方畑作農法の限界地で、漢族農民の絶対数が少なく、人口密度も希薄であったため、満蒙開拓団による土地収奪という問題は発生しなかった。

二 三河地方の沿革

アルゲン河に注ぐハブル・ウルブル・ガンの三河川の流域を三河地方と呼ぶ。三河地方は寒冷地で、地下には永久凍土が存在し、地表水の地下浸透を防いでいる。土壌は肥沃な黒土に覆われ、豊かな牧草地・丘陵・森林地帯を形成し、放牧にも農耕にも適した地域である⁽¹³⁾。

清末期（1909年）、三河地方はホロンバイル政庁の管轄下に置かれたが、民国期（1920年）に県制が施行されて室韋県（キラリン）に編入された。満州国時代、1932年7月に三河地方はオルコナ左翼旗の行政区域に編入され、ハイラル北方180キロにあるドラゴチェンカに旗公署・警察署・特務機関が置かれ、アタマン制度（ザバイカル・コザックの自治組織）を通じて白系ロシア人を管轄下に置いた⁽¹⁴⁾。

従来、三河地方にはごく少数の狩猟民族を除

いて原住民がほとんど存在しなかったが、ロシア革命後、白系ロシア人が家畜とともにアルゲン河を越えて中国領に逃避した。当初、彼らは短期間で帰国できると考えて、アルゲン河流域に仮小屋を建て、放牧中心の避難生活を送った。しかし、ソ連の力は年々強大となり、赤色パルチザンによる襲撃を恐れた白系ロシア人は、アルゲン河流域から東方の三河地方に入り込み、酪農を中心とする農耕による定住生活に入った。こうして、三河地方には祖国に戻れない数千名の亡命者が定住して、純ロシア農村の景観を呈した⁽¹⁵⁾。

中華民国時代の土地制度は室韋県政府の管理下に置かれ、白系ロシア人は県政府から許可証を得て土地を利用していた。しかし、1926年に新しい土地政策が施行され、中国国籍を取得した者、あるいは中国人の雇い人となった場合のみ土地使用権が認められた。白系ロシア人は高額土地利用税を嫌って、官憲の目の届かない奥地に逃避し、農業の発展が阻害された⁽¹⁶⁾。

満州国時代になると、新しい土地政策が施行され、白系ロシア人はオルコナ左翼旗公署に税金を納めれば、簡単な手続きで土地利用権が得られるようになった。政情の安定に伴って、白系ロシア人は定住傾向を強め、人口が増加した⁽¹⁷⁾。

東支鉄道経済調査局の調査によれば、1929年の三河地方の総人口は3950人で、その内訳は、ロシア人3150人、漢族300人、ブリヤート人20人、ツングース人80人、オロチョン人400人である⁽¹⁸⁾。満州国時代、国境地帯の治安が確保されて人口が増加した。1938年の総人口は9234人で、その内訳は、ロシア人7021人、漢族1882人、蒙古人47人、ツングース人37人、ヤクート人46人、オロチョン人140人、日本人61人である⁽¹⁹⁾。

三河地方にやって来た漢族は、初期には北辺

防備の兵士やキラリンの採金労働者を中心としていたので、アルゲン河に沿って漢族の部落が散在した。三河地方の漢族はほとんど農業はおこなわず、おもに商業・運輸業・採金業等に従事し、一部は白系ロシア人部落で商店・飲食店を経営したり、手工業に従事したりした⁽²⁰⁾。

白系ロシア人の経済活動の中心は農業で、酪農主体の有畜機械農業を経営した。住宅近くを柵で囲んで小規模菜園を営むほか、周囲で乳牛を放牧し、遠隔地で穀物を栽培した。地味が肥えて未開墾地が豊富に存在していたので、粗放な地力収奪型の農業経営がおこなわれた。すなわち、施肥はおこなわず、小麦・大麦・燕麦・ソバ等を数年連作して地力が枯渇すると、他の荒地を新たに開墾した。農業経営の目的は自給的性格が強く、高品質の農産物を自家消費し、余った小麦・牛乳等を市場向けに販売した⁽²¹⁾。

三河地方に定住した白系ロシア人は、寒冷地に適応した巧みな生活様式をもちこんだ。すなわち、大興安嶺の豊富な木材を利用して独特な丸太小屋の住居を建築した。家屋は冬季の保温に注意した構造で、室内は炊事兼用の壁ペチカで暖房をとり、屋外では防寒衣服を着用したが、屋内では薄着でも快適な温度を保持できた。また、食生活の面では、塩・茶・砂糖等を除いて、必要な食料はほとんど自給が可能で、黒パン・ジャガイモ・乳製品・豚肉・牛肉を中心とした栄養価の高い食物を摂取し、野莓・山葡萄等でジャムを作った。野菜は住居近くを柵で囲った家庭菜園で自給した⁽²²⁾。

三 三河地方の満蒙開拓団

1. 三河共同農村

三河共同農村の前史は、満州国に設立された鏡泊学園にまで遡ることができる。鏡泊学園は農業開拓を目的とした専門学校で、1933年8月

に第一期生が渡満した頃、入植予定地である吉林省鏡泊湖一帯では関東軍の討伐作戦がおこなわれていたので、敦化で一冬を過ごした。1934年2月、第一期生は軍隊の警備の下で農地の開墾を始めたが、5月に團長山田悌一等の教職員・学生・守備隊14名がゲリラの襲撃によって殉職するや、学園経営は頓挫した。1935年11月、鏡泊学園の最初で最後の卒業式がおこなわれ、同学園の卒業生達はみずからの進路を自分の手で切り開かなければならなくなった⁽²³⁾。

1935年8月、鏡泊学園の学生岡部勇雄・藤本重義・織戸孝・鮫島徳光・小原謙吉の5名は、学園指導員古賀新作の紹介により新京で興安北省オルコナ左翼旗の瀬崎清参事官と出会い、白系ロシア人が三河地方で寒冷地農法を短期間に成功させた経験を耳にした。岡部達は瀬崎の懇意で三河入植を決意するとともに、白系ロシア人の経験を利用して日本人開拓地を建設しようと考えた。しかし、それまで寒冷地農法の経験がなかったので、三河地方へ赴いて白系ロシア人部落に入りこみ、実地にザバイカル農法の指導を受けた⁽²⁴⁾。

半年間、白系ロシア人部落で生活して、岡部達はザバイカル農法の長所・短所を知り、寒冷地に適応した農業経営の可能性を理解した。すなわち、三河地方の厳しい自然条件の下では、日本農業の経験は役に立たず、白系ロシア人の経験に学ぶほかないことが分かった。食生活の面では、北満各地の開拓団のように、米と味噌の伝統的な日本食に固執する必要はなく、パンと牛乳で十分に栄養が摂取できることが分かった。また、住宅の面では、他の開拓団のように、寒冷地に保温効果を無視した日本式住居を建設するのではなく、ペチカで保温するロシア式の丸太小屋が健康を保持する上で優れていることを知った⁽²⁵⁾。

1936年3月、岡部等はガン河の支流イケン河

流域に入植し、三河共同農村が発足した。最初はロシア人が放棄した半埋設式仮小屋を住居とした。無肥料で連作するザバイカル農法は一種の収奪農法であり、未開墾地が豊富に存在する条件の下では合理性があるが、将来の人口増を予想する時、いつまでも収奪農法を続けることはできない。そこで、オルコナ左翼旗公署から公有地を借り入れると、耕地の三分の一を休閒させる三年二作の休閒農法を採用した。農業技術は寒冷地農法に習熟した白系ロシア人に倣って、有畜機械農法を採用した⁽²⁶⁾。気候条件から米作は不可能なので、小麦作を主体とし、酪農を従として開拓経営をおこない、将来は酪農主体を目標とした⁽²⁷⁾。

1936年度は蔬菜約3haと燕麦1ha余を作付けたほか、干し草や建築材を集積した。また、旗公署から家畜の貸付を受け、畜舎を造って頭数の増加をはかった。1937年度には、産業五カ年計画による農具の貸付を受け、ロシア人が放棄した旧開墾地を耕して小麦3ha、燕麦2haを作付けし、自給自足の確立を目指した。6月には満州拓殖の自由移民として認可され、満拓の融資を受けることができ、さらに旗公署のトラクターを借用して約100haを開墾した。1938年度には、小麦64ha、燕麦30ha、大麦5ha、蔬菜1haを作付けし、50haを開墾したほか、役畜の補充増加をはかった。また、満拓の融資で購入したバインダー・スレッシャー・発動機・製粉機等の農器具類が届いて、農業倉庫・製粉所・農具倉庫等が竣工した。1939年度には、小麦55ha、燕麦25ha、大麦6ha、ソバ3ha、蔬菜5haを作付けた⁽²⁸⁾。

三河共同農村は親類・縁者の招致により少しずつ人口が増加していった。1938年4月、イケン河を挟んだ対岸に依根西郷開拓組合が入植して三河共同農村に合流した。両者の人口の推移を見れば、1939年末には三河共同農村9戸(12

人)、依根西郷18戸(18人)、1940年末には三河共同農村17戸(25人)、依根西郷5戸(9人)、1941年末には三河共同農村19戸(31人)である⁽²⁹⁾。

三河共同農村は、共同宿舎・共同炊事・共同作業で農場建設に励み、宿舎・製粉所・穀物倉庫等の建物を共同所有してきたが、1940年10月から家畜を個人所有に移し、次いで炊事も妻帯者の増加につれて世帯別としたが、独身者は共同生活を続けた。しかし、使用農具が大農具で、土地が共有であったので、農作業は4、5戸が共同でおこなった⁽³⁰⁾。

三河地方の厳しい自然条件は漢族の伝統的畑作農法でも齒が立たず、外来者である日本人は白系ロシア人から学ぶほかなかった。三河共同農村は寒冷地に適したザバイカル農法を模倣しながら、それに改良を加えていった。生活面では、寒冷地での生活に習熟したロシア人の生活様式を採用した。住宅はロシア風の丸太小屋に住み、食生活の面では、米・味噌ではなく、パン・牛乳を主体として塩・バター・胡椒で味を付け、副食品の肉類も豊富で、家の周囲では馬鈴薯・キャベツ・カボチャ等の野菜を自給できた。

三河共同農村の入植者が現地の自然条件に適応して健康な営農生活を送ったのに対して、北満各地に入植した他の満蒙開拓団の場合、できるだけ日本での生活様式を保持しようとしたので、高い疾病率・死亡率を記録した。すなわち、現地の自然条件を無視して稲作に精力を注ぎ、米が生産できない場合、外部から購入してでも米と味噌の食生活を続けたが、寒冷地の気候の下で蛋白質・脂肪分の摂取量が少ないために栄養が不足する一方、現地の気候風土に合わず、防寒施設が不十分な住居を建築して、健康に悪影響を及ぼしたのである⁽³¹⁾。

2. 興安義勇隊訓練所（興安義勇隊開拓団）

1938年から満蒙開拓青少年義勇隊の送出が開始され、本国の内原訓練所のほかに、嫩江・孫呉・鉄麗・勃利・寧安に現地訓練所が設けられたが、経験ある指導員が不足していた。その頃、岡部は加藤完治から内原訓練所の幹部になるよう誘惑されたが、彼はこれを断った。その後、三河地方で義勇隊訓練所を建設する計画が立案され、新京の満州拓殖公社の中に設けられた満蒙開拓義勇隊訓練本部から訓練所の責任者になるよう要請があり、岡部は鮫島・織戸等とともに訓練所の建設と指導にあたることにした。1939年秋、興安義勇隊訓練所の建設が開始され、イケン河と並行して流れるシベリ河右岸の草原地帯に、防寒を第一にしたロシア式の堅牢な宿舎ができた⁽³²⁾。

1940年4月、先遣隊50名が三河地方に到着し、11月に本隊の近内中隊が鉄麗訓練所から到着して、訓練生319名の興安義勇隊訓練所が発足した。訓練生は東北の福島県・山形県の出身者が多かった。訓練所の主要幹部としては、所長が岡部、中隊長が近内、総務が織戸、教練が藤原、農事が鮫島、畜産が梅川、経理が藤田、教学が富樫、開拓医が村上という分担で、通訳は白系ロシア人ワロジャーであった⁽³³⁾。

訓練所の農業実習のほか、一般教科や軍事訓練もあったが、岡部所長は軍事訓練をあまり好まなかった。訓練内容としては、農業のほか、畜産・漁業・乳製品加工・製材・製粉・皮鞣・トラクター運転・無線技術等があり、日常生活では、生徒の中から炊事係を選び、みずからの生活を自分たちの手で営ませた。また、訓練生5、6名を一班として白系ロシア人農家に三カ月単位で住み込みで実習させ、酪農業・ザバイカル農法を実地に教えた。農機具としては、トラクター・バインダー・スレッシャー・運搬用トラック等を保有した。営農活動の面では、

100haの耕地を保有して大型農機具により麦類を作付け、乳牛100頭、肉牛50頭、馬100頭を飼育した⁽³⁴⁾。

太平洋戦争が勃発して戦況が緊迫するや、興安訓練所は二期生を迎え入れることができなくなり、一期生が二年間の訓練を終えるや、1942年10月に興安義勇隊開拓団に移行した。入植地はイケン河・シベリ河・イルガチア河の流域に選定され、旧訓練所を本部として、興北郷・興西郷・大和郷の三部落を置いた。興安開拓団は「開拓の花嫁」を迎えて大いに発展するはずであった。しかし、戦局の悪化に伴って、義勇隊員の中には義勇隊開拓団に移行する前に関東軍に現地召集される者がおり、義勇隊開拓団員の多くも現地召集され、1942年10月に245名いた在団者は、1944年6月には184名にまで減少した。終戦時、興安開拓団には家畜がやたら多く、日本馬58頭、在来馬82頭、乳役牛113頭、羊43頭、豚等がいた⁽³⁵⁾。

四 ソ連軍参戦と開拓団の逃避行

太平洋戦争の戦局が悪化するにつれて、関東軍は徴兵年齢に達した北満各地の開拓団員を次々と現地召集し、終戦直前には40歳以下の成年男子は根こそぎ動員され、開拓団には老人・婦女子・子供のみが残された。三河共同農村では、1944年1月に織戸が、4月に藤本が、翌年5月に岡部が召集された⁽³⁶⁾。終戦時、三河共同農村の在団者19名（在籍者34名、応召者13名、不在者2名）、興安開拓団の在団者40名（在籍者340名、応召者285名、不在者15名）である⁽³⁷⁾。

1945年8月9日未明、ソ連軍機械化部隊がソ満国境を越えて満州国への攻撃を開始し、関東軍の守備陣地は次々と陥落した。興安北省では、満州里からハイラル方面へとソ連軍機械化部隊

が殺到するとともに、アルグン河の対岸でオルコナ左翼旗を守備する関東軍三河警備隊の監視哨が襲撃された。この非常事態を前にして、三河地方の在留邦人（旗公署・協和会・合作社・開拓団等）は鉄道沿線を避け、人跡未踏の大興安嶺を越えて避難を開始した⁽³⁸⁾。

9日、三河共同農村（団長鮫島徳光）・興安義勇隊開拓団（団長梅川忠）の在団者は、ドラゴチェンカとウェルフクリーの在留邦人とともに興西郷に集結した。10日、開拓団と他の在留邦人は数十台の馬車を仕立てて避難行動に移った⁽³⁹⁾。途中、大興安嶺の山中には食料がなかったが、避難の途中で開拓団の牛馬二百数十頭・羊五十頭を食料として食いつないだ。一部の牛は村に戻ろうとしたが、民間人のあとをすすむ三河警備隊に捕獲されて食料となった⁽⁴⁰⁾。

三河からの避難民の一行は原生林の道なき道を踏み分け、湿地帯に悩まされながら、興安東省モリダフ旗布西を目指して東進した。9月4日、モリダフ旗クリチ部落に到着し、ここで日本の無条件降伏の報を得た。11日、布西鳴沢開拓団に到着し、開拓団の家に分宿した。12日、警察隊、旗公署職員、開拓団はソ連軍によって武装解除された。13日、ようやく避難予定地の布西に到着した。この間、三百人余の避難民は一人の犠牲者を出すこともなかった⁽⁴¹⁾。

9月21日、開拓団員は嫩江に移ったが、ここで男子と婦女子は別々に収容された。10月2日、男子は嫩江を出発し、途中北安を経て、月末に長春に到着して帰国を待った。婦女子は約半年間嫩江に滞在し、翌年3月末にチチハルに移動し、7月に長春に到着した。8月、三河共同農村・興安開拓団の関係者は長春から錦州方面へと南下し、葫蘆島で引き揚げ船に乗り込み、9月初頭ようやく博多に上陸した。

布西到着後、三河共同農村の団員は嫩江で二人死亡し、興安義勇隊開拓団の団員は嫩江で二

人、長春で一人の計三人が死亡している。しかし、北満各地に入植した他の開拓団と比較した場合、犠牲者数は格段に少なかった⁽⁴²⁾。

むすび

興安省には蒙地保護政策が存在していたので、1940年以前の満蒙開拓団の入植はいずれも特殊な理由によるものである。三河地方では、蒙古族人口が少なく、未開墾地が豊富に存在していたため、オルコナ左翼旗公署が開拓団を誘致することは蒙地保護政策に抵触しなかった。1940年以降、興安省の土地政策は大きく転換し、とくに興安東省を中心として開拓団の受け入れが積極的に始まった。興安省は人口に比べて未開墾地が豊富であったが、開拓団は漢族農民の多い鉄道沿線に集中的に入植したため、深刻な民族的軋轢を招いた。

北満各地では、開拓団の入植に先立って、満州拓殖公社による漢族の既耕地・家屋の強制買収がおこなわれた。三河地方では、未開墾地が豊富で原住民から土地を収奪する必要がなかった。漢族はおもに商業・運輸業・採金業に従事し、農業技術上の理由から農民が少なかったので、開拓団は彼らとの土地紛争に巻き込まれなかった。三河地方には先住者である白系ロシア人がいたが、外来者という点では白系ロシア人も日本人も立場が共通していた。故国を捨てた白系ロシア人の政治的立場はきわめて弱く、彼らは日本人とは敵対しなかった。

満州移民が開始された当初、満蒙開拓政策の理念として自作農主義が高らかに唱えられたが、実際の移民送出過程では、開拓団員の地主化の傾向が顕著となった。すなわち、日本国内で零細経営に苦しんでいた貧農・小作農達は、北満の入植地で20ha余の土地を分与されたが、彼らの労力では土地が広すぎて耕しきれず、中国

北方畑作農法にも習熟していなかったのも、もてあましてしまった。そこで、開拓団員の多くは余分の土地を漢族・朝鮮族の農民に貸し付ける道を選んだ。三河共同農村の場合、白系ロシア人を手本として寒冷地農法を学び、あくまでも自作農主義を貫いた。

北満各地の開拓団は、米と味噌の食生活を捨てきれず、稲作を農業経営の中心に据え、住居・服装・食事の各分野で日本の習慣を持ち込んだので、現地の気候・風土にうまく適応できなかった。三河共同農村の場合、ザバイカル農法を受け入れ、ロシア風の丸太小屋に住み、パンと牛乳の食事にも慣れて、健康な営農生活を続けることができた。開拓の成果を農業経営の成否のみで評価すれば、三河共同農村は成功した数少ない事例であると評価しうる。

北満各地、興安南省・東省の入植地では、大規模な土地収奪がおこなわれたので、現地人の激しい怒りを招き、終戦前後の避難の最中に多くの開拓団が彼らの襲撃を受けている。三河地方の開拓団の場合、現地人の土地を収奪せず、蒙古人・オロチョン人・白系ロシア人の手引きを得て、大興安嶺の原生林を避難経路に選んだので、避難時の被害を最小限に食い止めることができた。

- (1) 興安局調査科編「満州帝国蒙政十年史」(『蒙古研究』第四巻第五・六号、1942年12月、16-17頁)。
- (2) 竹村茂昭「蒙地の話」(『蒙古研究』第二巻第四輯、1940年11月9-11頁)。
- (3) 蒙古研究会編「蒙地管理要綱関係記録」(『蒙古研究』第四巻第五・六号、附録、1942年12月、9頁)。
- (4) 満州開拓史刊行会編『満州開拓史』1980年、507,818-821頁。以上の統計は開拓団引揚者が提出した報告に基づく集計値であり、実際の団員数より低めの数値になっている。
- (5) 満州国通信社編『満州開拓年鑑』昭和19年度、310頁。
- (6) 長野県開拓自興会満州開拓史刊行会編『長野県満州開拓史』各団編、1984年、106頁。
- (7) 井上勝英『学生衛生隊報告』学生義勇軍本部、1941年、142頁。
- (8) 『満州開拓史』328頁。
- (9) 『長野県満州開拓史』各団編、717頁。
- (10) 『満州開拓史』322頁。
- (11) 北満経済調査所編『興安北省及東省に於ける日本移民適地豫察調査報告』1938年、72頁。
- (12) 前田武夫『興安東省事情』齊々哈爾鐵道局総務課、1940年、81頁。
- (13) 満州事情案内所編『三河事情』1941年、25頁。
- (14) 中村巖「額爾古納左翼旗(三河地方)事情」(『満鉄調査月報』第十四巻第五号、1934年5月、114頁)。
- (15) 吉川忠雄・亘利忠雄『興安北省三河地方農村豫察調査報告』北満経済調査所、1936年、2-3頁。
- (16) 満鉄資料課情報係編「呼倫貝爾三河地方概説」(『満鉄調査月報』第十三巻第五号、1933年5月号、153-154頁)。
- (17) 『三河事情』13,17頁。
- (18) 「呼倫貝爾三河地方概説」(前掲誌、151頁)。
- (19) 竹山増次郎『北満開拓地を見る』大阪商科大学興亜経済研究室、1941年、4頁。
- (20) 1940年のウエルフクリー村での調査によれば、総戸数180戸(総人口1205名)のうち、白系ロシア人163戸(1077名)、漢族17戸(128名)である。漢族戸数の内訳を見れば、農家1戸、飲食店3戸、靴屋3戸、雑貨店2戸、大工2戸、鍛冶屋1戸、旗公署勤務1戸、労働者4戸である。以上の戸数には含まれない漢族独身者50名のうち、23名の苦力が農家に雇われていた(北満経済調査所編『三河露人農家の農業経営調査報告』満鉄調査部、1943年、4-5頁)。
- (21) 『興安北省三河地方農家豫察調査報告』61, 67, 125頁。
- (22) 東京帝国大学医学部大陸衛生研究会編『三河

露農調査』満州国立開拓研究所,13,16,19頁。

- (23) 満鉄弘報課『人柱のある鏡泊湖』満州日日新聞社,1940年,24 - 28,60頁。
- (24) 水上七雄『大興安嶺の落日』1989年,67 - 70頁。
- (25) 東京帝国大学医学部の三河調査班は、次のように述べている。「一般生活状態及び農法は殆ど其の総ての点について附近の白系露西亜人のそれと同様であり、我々は三河共同農村東郷に於ては露人農家の住人が其儘日本人であったと云ふ様な感じさへ持ったのであった」(『三河露農調査』12頁)。「三河共同農村東郷では元来が初期建設者が当初白露部落のコザック農民の生活態度を良く観察するだけの用意があった為、殆ど前述に似た厨房の用式をとって居る。そして現地に於ける食糧の自給自足をよく実現して居た」(同上書18頁)。
- (26) 『北満開拓地を見る』20頁。
- (27) 古沢敏雄『三河その青春の碑』1976年,27 - 28頁。
- (28) 『北満開拓地を見る』18 - 19頁。
- (29) 『満州開拓年鑑』昭和15年版,133頁。同,昭和16年版,110頁。同,昭和17年版,199頁。
- (30) 『三河露農調査』12頁。
- (31) 『北満開拓地を見る』21 - 22,29 - 30頁。
- (32) 『大興安嶺の落日』91 - 92頁。
- (33) 同上書,135,148頁。
- (34) 『三河その青春の碑』45 - 46頁。
- (35) 『大興安嶺の落日』93 - 97頁。
- (36) 同上書 97,107頁。
- (37) 外務省アジア局第五課『興安総省概況』1952年,36 - 37頁。
- (38) 佐村恵利『ああホロンバイル蒙古物語』1993年,87 - 90頁。
- (39) 同上書,92頁。
- (40) 『大興安嶺の落日』121頁。
- (41) 『三河その青春の碑』72,76頁。
- (42) 『興安総省概況』37 - 38頁。